

容疑者核心語らず

以前から周囲に虚言

ン・カルロス・ピサロ・ヤギ容疑者30は、全面否認から一転して容疑事実を認め始めた。しかし、本名をはじめ供述内容は二転三転し、動機や犯行の具体的状況については「悪魔」のせいにして核心を語ろうとしない。事件直前には、仲間から「虚言癖」がある

要所で「悪魔」

「気の弱い男」と疎んじられ、1人で過ごす姿が目立った。――一面参照

同容疑者は逮捕後、弁護士と毎日接見し、犯行時の状況や現在の心境を報道陣に伝えている。5日の接見は約1時間50分。接見中、時折涙を流

広島市安芸区の小1女児殺害事件が起きてから6日で2週間。殺人と死体遺棄の疑いで逮捕されたペルー国籍の自称ファ

すこともあったという。

「悪魔が自分の中に入ってきて体を動かした」。

同容疑者は逮捕翌日の1日、こんな言葉で全面否認から一転、殺害と死体遺棄の容疑を認めた。

「否認したのも悪魔がやったこと」祈っていたら悪魔が逃げた」とも語った。「肝心な場面になると作画的に『悪魔』を持ち出す」と捜査幹部は話す。

小原克博・同志社大教授（宗教倫理学）によると、「悪魔」という言葉はカトリック文化圏では日常的に多用される言葉という。小原教授は「特異な言葉を使っているわけではない。悪魔が入った」と言うことで、責任を転嫁しているだけ」と話す。「悪いことをする気

はなかった」など明確な動機も語っていない。